

スコットランドのトラベラーの昔話

美濃部 京子

Story-telling Tradition among Scottish Travelling People

Kyoko MINOBE

1. はじめに

スコットランドのグリムとも呼ばれるジョン・フランシス・キャンベル John Francis Campbell が『西高地地方の昔話』*Popular Tales of West Highlands* を発表したのは、今からおよそ130年前の1860年のことであるが、キャンベルの功績によりスコットランドのゲール語地域は民間説話の宝庫として知られるようになり、現在もまだ生きた伝承が残っているとされる。ところが、同じスコットランドの中でも低地地方のスコットランド語¹地域の方は、キャンベルの時代にすでに語りの伝承がほとんど死に絶えてしまっていると考えられていた。

一方、イングランド地域においては、民間説話はバラッドの形式をとる傾向があり、本格昔話は貧困であると、スティス・トンプソン Stith Thompson も指摘しているが²、スコットランドのスコットランド語地域においても、バラッドの伝承が非常に豊富であるのに対して、今世紀中頃までに報告された昔話の話数は驚くほど少なかった。ところが、1950年代になって、状況は一変する。それは、エジンバラ大学のスクール・オブ・スコティッシュ・スタディーズの調査員としてヘイミッシュ・ヘンダーソン Hamish Henderson が、スコットランドのアバディーン州でバラッドを収集しているときのことだった。世界的にも有名なバラッドの歌手であるジーニー・ロバートソン Jeannie Robertson に、昔話を語ってくれるようお願いしたところ、「龍退治」の類話を語ってくれたのだが、ヘンダーソンはその時「新しく開かれた地下の宝庫の淵に立っていることを実感」したという³。それ以来、スコットランドのトラベラーの中から次々と新しい語り手が発掘され、スクール・オブ・スコティッシュ・スタディーズの音声資料室⁴は、またたく間にそうした語りの資料で溢れるほどになったという⁵。イングランドのほうでは、すでに途絶えてしまって久しいといわれている本格的な昔話の語りの伝承が、スコットランドのトラベラーの間ではまだ生きていたのである。

さて、ここでいう「トラベラー」とは一般の旅行者のことではない。スコットランドには昔から、「ティンカー tinker」とか「ティンクラー tinkler」（鋳掛屋）と呼ばれる人たちがいた。ひとつのところに定住することなく、ブリキで鍋や釜を作ったり修繕したりしながら、旅をして生活していた人たちである。実際には、鋳掛屋の仕事だけではなく、茅や藁で籠を作ったり、農作業の手伝いをしたり、バグパイプの演奏をしたり、占いをしたりして生活していたようである。「トラベラー」とはこうした放浪生活者が自分たちのことをそれ以外の人と区別して使う呼び名である。「ティンカー」や「ティンクラー」といった呼び方には「浮浪者・乞食」といった意味があることから分かるように、軽蔑的な意味合いが含まれるため、トラベラー自身は好まず、「トラベラー」あるいは「トラベリング・ピープル」と自ら称している。

本稿では、こうしたトラベラーを代表すると思われるふたりの語り手ダンカン・ウィリアム

ソンDuncan Williamson とスタンリー・ロバートソン Stanley Robertson を紹介し、彼らの伝承態度および彼らの語る昔話の特徴から、トラベラーにとっての昔話について考えてみたい。

2. トラベラーの語り手たち

2. 1 ダンカン・ウィリアムソン

ダンカン・ウィリアムソンは1928年、アーガイル州で16人兄弟の7番目として生まれた。両親は籠を作ったり、ブリキ製品の修繕をしたり、物を売り歩いたりして生計を立てており、貧しいトラベラーの生活だった。両親とも読み書きはできなかったが、昔ながらのトラベラーの伝承を受け継いでおり、子どもたちに話して聞かせる話は尽きることがなかったという。

ダンカン自身は、7才のときに学校で話を語ったのが最初の経験で、興味を持って聞いてくれた下級生に次の週も語ってほしいとせがまれ、話に興味を持つようになったという。その後、ダンカンは15才で家族を離れ、ひとりの石工の下で働き始める。ニール・マッカラン Neil McCallun というその石工は、ゲール語の話し手であり、ダンカンは多くのゲール語系の話や彼から聞いており、ダンカンのレパトリーの中の優れたもののいくつかは彼から聞いたものであるという。それからダンカンは兄や母の従兄弟たちと旅の生活を送り、彼らからも多くの話を聞いた。

ダンカンは21才で、従姉妹のジーニー・タウンズリー Jeannie Townsley と結婚し、7人の子どもをもうける。1950年代半から、昔からトラベラーたちがテントを張るのに利用していた場所が政府によって閉鎖されたりつぶされたりしたこともあり、また子どもの学校の問題などもあって定住生活に移っていくトラベラーたちも多かったようだが、ダンカンは昔ながらの方法で子どもたちを育てようと考えていた。テント生活を営み、自然と親しみ、語りによって子どもたちに与えられるものを与えようとしたのである。

ジーニーの死後、しばらくして、ダンカンは2人目の妻リンダ・ヘドリー Linda Hedlee と結婚する。リンダはスクール・オブ・スコティッシュ・スタディーズでトラベラーの伝承を学んでいたアメリカ人の学生であり、トラベラーたちのキャンプを訪れては調査を行っていたが、その後ダンカンと結婚し、トラベラーの生活を続け、ふたりの子どもをもうける。現在、ダンカンの語る昔話が多く活字にされてきているが、それにはこのリンダの功績が大きいといえるだろう。

ダンカンの語りは、最初の10年で数百話が記録され、そのレパトリーは尽きることがないほどだという。1950年以前にはスコットランド語地域において知られていた国際話型は30にも満たなかったが、ダンカンだけでも少なくとも100の話型に属する話を知っており、アアルネートンプソンの『昔話の型』*The Types of the Folktale*⁶には含まれていない話もそれ以上にあるといわれている。

子どもが成長した現在、ダンカンは妻のリンダと共に自らのレパトリーを活字にする仕事に従事するかたわら、各地の学校を回って話を語ったり、国際学会やストーリー・テリングの催しなどのゲストとして招かれて語ったり、テレビやラジオでその語りを披露したりしている。

2. 2 スタンリー・ロバートソン

スタンリー・ロバートソンは1940年アバディーン州で8人兄弟の7番目として生まれた。両親

親ともに優れた語り手であり、父方の叔母には前述した世界的に有名なバラッド伝承者であるジーニー・ロバートソンがいる。スタンリーが生まれた頃には、もう定期的に旅して回る生活はしていなかったようだが、夏には旅に出てキャンプ生活を送り、キャンプ・ファイヤーを囲んで音楽を演奏したり、歌を歌ったり、物語を語ったりしたという。また貧しい暮らしの中で寒い冬には空腹と寒さを忘れるために話をしたこともあったらしい。生活に余裕ができるとパーティーを開き、そこで音楽や語りを楽しむこともあったようだ。ところが、トラベラーの世界においても、現在他の国々で起こっているのと同じ様にテレビの出現が家での伝承を廃れさせることになった。スタンリーの家でも、母親がテレビを買ったところ、パーティーに集まってくる人たちは、昔話を語ることをやめ、テレビに見入ってしまったそうだ。

スタンリーは幼い頃から母親の影響でカトリックの聖職者になりたいと思っていたが、現在は家族揃ってモルモン教の信徒であり、活発な活動をしているようだ。また、軍人であり連隊のパイプ奏者であった父親の影響で、スタンリーは軍隊式のパイプ演奏を身につけた。そして、その後何年かにわたりいくつかのバンドで演奏活動を行なうが、健康上の理由から退団している。そして、魚屋で魚をさばくことを仕事とするかたわら、宗教活動やパイプ演奏、昔話の語りやバラッドを歌うことに関わっていった。

スタンリーのレパトリーも無限に近く、数百ともいわれる物語のほか、それ以上の歌やバラッド・歴史伝承も伝えているといわれる。スタンリーには6人の子どももいるが、子どもたちも皆歌い、語ることができるといい、一番下のニコル Nicole という娘は11才のときにすでにすぐれた語り手であり、一度話を聞いただけで、細かいところまで覚えて語ることができたという。

現在のスタンリーは、教会の中で歌や語りを披露するほか、スコットランド各地のフォーク・クラブやフォーク・フェスティバルに招かれたり、博物館・大学・学校などに招かれてその伝承を披露したり、講演を行ったりしている。テレビやラジオに出演することもある。

ダンカンが自らのレパトリーをできるだけそのままの形で活字に残そうとしているのに対し、スタンリーはその文才を生かし、自分が伝え聞いた話を自らペンを持つことによって語り直し、独特の作品を発表している。『アルフォードへの脱出』*Exodus to Alford* は自らの夏の旅とキャンプ生活を基に書かれたものだが、チョーサー Geoffrey Chaucer の『カンタベリー物語』*The Canterbury Tales* さながら、旅の途中でそれぞれの参加者が順番に語り手になり、自らの物語をキャンプで語るという構成になっている。全体は3部に分かれ、最初の2部は幽霊や妖精・悪魔の話など世間話・伝説に近いものも多いが、最後の部分は全て「ジャック話」Jack-stories でまとめられている。この「ジャック話」については、次の章で詳しく述べるが、トラベラーにとって欠かすことのできない物語群である。また『魚河岸』*Fish-Hooses* では、自らの働いた経験を基にそこで聞いた話をそこで働く人たちの様子も交えて描いている。

3. トラベラーにとっての昔話

3. 1 語りの場

トラベラーが昔話を語るのは、一日の旅を終え、テントを張り、夕食も済んだ夜のことだった。家族でたき火を囲み、音楽を演奏したり、歌を歌ったり、話を語ったりという一日のうちで一番楽しい時間が始まるのである。時には同じところでテントを張っているいくつかの家族

が一緒になって一つの火を囲むこともあった。それはまた語り手たちにとって新しい話を覚える機会でもあった。ダンカン・ウィリアムソンの『炉端で語るトラベラーの子どもたちの話』*Fireside Tales of the Traveller Children* のイントロダクションには子どもたちから見たそのときの様子が詳しく描かれている⁷。

夜も更け、母親が小さな子どもたちを寝かしつけにかかる頃、子どもたちは火の回りに集まり、「お父さん、お話をして」とせがむ。父親は子どもたちを黙らせ、近くに寄って来るようにとお化けの話をしたりする。そしてひとりまたひとりと子どもたちが眠りにつくまで話を語り続けるのである。小さな子どもたちが寝てしまうまでは動物の話などが語られるが、小さな子どもたちが眠ってしまうにつれて、話は段々自由で激しいものになっていく。動物の話から、魔女や鶏番の女の話へ、そしてさらにバーカー（後述）や幽霊の話へと移っていくのである。3才から5才の子どもたちは、キツネやウサギや鳥たちが話をする動物の話をよく聞く。もう少し大きくなって6才ぐらいになると、ジャックが主人公の話聞く。10才を過ぎると、悪魔や幽霊、人さらいの話なども怖がらずに聞けるようになるという。そして、12、3才になるとトラベラーの子どもたちは大人であるとみなされ、どんな話を聞くことも許されるし、自分で語り始める子どもたちも出てくる。

何を語るかは語り手の自由にまかされていて、あらかじめプログラムが決められるなどということにはなかった。過去の経験談を話してもよいし、古い昔から語り伝えられている昔話を語ってもよかった。火の回りに集まっている全員が順番に何か話をしたが、話を選ぶ際には聞き手たちの性別や年齢を考慮にいったという。もちろん、語りは子どもたちのためだけのものではなかった。ダンカンは24才の時に兄弟や従兄弟たちと一緒に夜の10時から朝の6時までひとりの老人が話を語るのを時が経つのも忘れて聞いた経験について語っている。

3. 2 トラベラーにとっての語りの意義

それでは、こうした話をトラベラーたちはどんな意識を持って語っていたのだろうか。

ダンカン・ウィリアムソンは自分が大人に混じって話を聞いたときのことを語っているが、話を単なる楽しみとしてではなく、真剣にとらえていたという。若い者が祖先の知恵を学ぶのは語りという儀式を通してだった。そうした知恵は毎日の生活に役立つものであり、心の支えになるものであった。物語の中には人生の中で避けることのできない二重性が扱われている。善と悪、愛と憎しみ、弱者と強者、残酷さと優しさ、苦悩と喜びなどである。物語の主人公たちは勇気や信頼、知恵、自信、ユーモア、何があっても生き残ろうという意志をもって登場するが、こうした性質が厳しいトラベラーの生活には必要だったのだ。物語を聞くことによって、いかに生きるかを学んでいく。物語から学ぶことは、時にトラベラーを疎外している学校で学ぶことよりもずっと身近なことばかりであったという。

トラベラーの子どもたちは、動物の話聞くことによって、動物に優しく親切にし、生き物を愛し、尊重することを学ぶ。ジャックの話聞いて、両親の言うことをよく聞かなければいけないということ、そして、自分で世の中に出て行って生活していくことを学ぶ。また、多くを期待し過ぎてはいけないし、人の物を盗んだり、人を殺したり悪者になってはいけない、ということも学ぶ。

「それは単なる物語ではない。一生のあいだ人の中に残るものであり、伝承によって伝えられてきたものである」と、ダンカン・ウィリアムソンは言う⁸。話を語った人はいずれ死んで

しまうけれど、その語り手の存在は話としてその話を聞いた人の中にずっと生き続けるというのだ。したがって、ダンカンがそうやって受け継いできたものは、できるだけ忠実な形で子孫に伝えなければならないと考えている。死んだ祖先の記憶を大切にしているのだ。物語は死んでいく両親や家族の最大の形見なのである。それは、次のダンカンの言葉によく表れている⁹。

今の子どもたちはおもちゃにしても何でもたくさん与えられ過ぎていて、だが、おもちゃは壊れてしまう。しかし、お話は伝わっていく。決して失われることはない。お話はずっと永遠に残される。大きくなるとおもちゃはなくなってしまっていて、忘れてしまう。トラベラーは何も与えることはできないが、お話を与えることはできる。子どもの心の中に永遠に残る種を植えるんだ。ベツィー [ダンカンの娘] が子どもの時に私が話した話を語り伝えていく。私は買うことのできないものを娘に与えてきたんだ。永久に伝えられ続ける何かを。おもちゃではないが、贈り物だ。それこそトラベラーの家族に必要なものなんだ。

3. 3 「ジャック話」と「バーカー」の話

トラベラーが語る話には様々なものがあり、自分や祖父母・先祖の経験談や幽霊などの不思議な話に始まり、各地の伝説や国際話型に含まれるような昔話もあるが、その他トラベラーの間で特徴的な話も多い。先述した「ジャック話」や「バーカー」の話というのがそうである。

「ジャック話」というのは、ジャックという名の若者が主人公の一連の昔話群である。一見さえないように見える主人公ジャックが知恵と勇気と運を使って冒険を成し遂げ、成功する話である。とはいえ、数々のジャック話に登場するジャックが全て同一人物というわけではない。話によって、愚か者であったり、怠け者であったり、頭が良かったり、3人兄弟の末っ子であったり、様々である。日本の昔話における「太郎」のように、昔話の主人公を一般化して表す名前であるのだが、トラベラーにとっての「ジャック」はそれ以上の意味を持っている。

このジャック話をひとつも伝承していないトラベラーの家族はないだろうとスタンリー・ロバートソンは言っているが、トラベラーは自分たちを主人公のジャックと同化させてこれらの話を聞く。日頃さえないように見えるが、実際には素晴らしい力を持っているのだということがトラベラーをひきつけるのであろうし、ジャックが冒険の旅をするということがトラベラーの生活様式にあっていのだらう。ロバートソンは『アルフォードへの脱出』において、ジャック話の持つ意味について次のように述べている¹⁰。

「ジャック話」は励ましの話である。街での生活で感じている絶望感や街の多くの人々の偏見から、トラベラー（特に子どもたち）全員をすくいあげる物語なのだ。ジャックは素晴らしく模範的な人物である。——いつでも、自分の中によい所を見つけ、回りの人々の信頼を得ることによって、不幸な生活を乗り越えて行く。——ジャックは真実の道をひとりで行んで行くのではない。——援助者に導かれ、助けられるのだが、この援助者がジャックにとっては非常に重要なのである。

物語の最後には必ず報酬がある。街の中では非常に多くの困難に立ち向かわなくてはならないトラベラーの子どもたちはジャックの手柄話と彼が持つ優れた教訓に励まされるのである。したがって、「ジャック話」は両親が子どもたちの心の中にある種の価値体系——と逃げ場所——を少しずつしみこませるひとつの手段なのである。

ところで、この「ジャック話」において、トラベラーの類話が他の国際話型の類話と大きく異なっている点がひとつある。普通ハッピーエンドの昔話において、主人公は成功すると今までの貧しい暮らしを捨てて美しい王女と結婚し、王様になって国を治めるとというのがほとんどであろう。しかし、トラベラーの話においては、冒険を成し遂げ成功しても、最後には今までの自分の（トラベラーとしての）暮らしに戻ってしまうのである。王に匹敵する仕事を成し遂げた後も、王座にとどまることはなく、また自然の暮らしに戻って行く。トラベラーにとって、ジャックの成功譚は今の貧しい生活を否定するのではなく、肯定するところに意味があるのである。

一方の「バーカー」とは人さらいの一種である。ウィリアム・バーク William Burke がウィリアム・ヘア William Hare とともに15人を殺害し、スコットランドの解剖学者ロバート・ノックス Robert Knox に解剖用死体として売り渡していたとして、1829年エジンバラで絞首刑になるという事件があった。「バーカー」というのは、この主犯の名前バークに由来するものであるが、この事件以来トラベラーたちの間で、人を殺して死体を売りつける「バーカー」に対する恐れが広まり、それに関する話が多く生まれたという。トラベラーたちは住居を持たない放浪の民であったので、いなくなったとしても警察にばれることが少ないからバーカーに狙われやすいと考えられたのだろう。実際、トラベラーたちは一般の人たちから敵対視されることも多かったし、差別され続けてきた。16、7世紀にはトラベラーであるということ自体が法律上許されず、死刑になった例さえあったという。そうした被害者意識がこのバーカーの話にひかれる引き金にもなったのだろう。話の内容としては、自分はいかにしてバーカーに連れ去られずにすんだか、というものが多くいようである。

4. トラベラーの話の特徴

これまで、トラベラーの話の伝承について述べてきたが、最後に実際にトラベラーに語られている話を取り上げて、そこに見られる特徴を見てみたい。その特徴は「ジャック話」のところでも少し述べたが、トラベラーの生活の肯定にある。それがよく表れている例として、ダンカン・ウィリアムソンの「王様の足に刺さった棘」‘A Thorn in the King’s Foot’ ”を取り上げよう。まず、最初にあらすじをあげておく。

昔、王様にひとりの男の子が生まれるが、醜いせむしだったため、森に捨てさせてしまう。男の子は森に住む老婆に拾われ育てられるが、男の子を生んだ王妃は悲しみのためやせ細って死んでしまう。その後、王様は老婆のために足に棘が刺さり、苦しむが、だれも治すことができない。老婆に育てられていた王様の息子だけがこの病を治すことができるのだが、それには条件があった。ひとつは、王様が触ることによってしか治らないこの男の子の母親代わりである老婆の醜い顔のできものに王様が触ること。もうひとつは、200日の間王に代わってこの男の子に王の仕事任せ、王は流れ者の乞食に身をやつして民衆の間に入るということである。息子は王の足を治し、王は老婆のできものを治す。そして、王は流れ物の乞食として、民衆の間に入り、農作業を手伝い、賃金をもらう。またあちこちに旅を続け、民衆の間で働き、その仕事を楽しみ、そうした貧しい人たちのお陰で王国が成り立っていたことに気付く。一方、せむしの息子の方は、人々の訴えをうまくさばき、今までの王様よりうまくものごとを運ぶと思わせるほどである。税金は下げられ、人々の穀物の取り分も多くなり、人々はより自由な暮らしを楽しめるようになる。200日の間に、王の政策はすっかり変えられ、人々の喜ぶ顔が見ら

れるようになる。王は王で民衆と暮らすことが楽しくて仕方がない。城に戻った王はせむしの息子に褒美を取らせ、首相として城に残ってくれるように頼むが、息子はそれを拒み年老いた母親代わりの老婆のところへ帰っていく。

ハッピーエンドのヨーロッパの昔話を読み慣れているものにとって、この話の結末は意外であり、落ち着きの悪いものである。普通であれば、王様は一生乞食としてさまよい歩き、代わりに息子が王様になってめでたしめでたしという形で終わるであろう。ところが、この話はそうは終わらない。貧しい者たちの生活を決して否定することはなく、それが楽しく素晴らしいものであると語る。そして、それを統治者である王にも実感させる。一方、森でひっそりと暮らしている女に育てられた息子は素晴らしい統治能力があるにもかかわらず、王になることを拒否し、自然の中で暮らすことを選択するのである。一見社会の底辺にいると思われるような境遇で生活していたトラベラーたちが自分たちの生活に誇りを持ち、それを広く子孫にも伝えていこうという思いが強く表れた話であるといえるのではないだろうか。

もうひとつ「はりねずみ男」『The Hedgehurst』¹² の例を見てみよう。この話もダンカン・ウィリアムソンの語りによるものであるが、グリムの「ハンスはりねずみぼうや」(KHM108)と同じ話型(AT441)の話である。

はりねずみの姿で生まれた男の子は、家を出て森で家畜とともに暮らしているが、そこに道に迷った王様が通りかかる。はりねずみ男は、城に帰ったとき最初に出迎えたものを差し出すという条件で、森から出る道を教える。城で王を最初に出迎えたのは王女であり、王は娘をはりねずみ男に差し出さねばならぬことになる。王女はりねずみ男と結婚する。夜になると、男はりねずみの皮を脱いで外に出て行くが、王女がその皮を燃やすと魔法が解け、はりねずみ男は人間の姿に戻ることができる。

この話も大筋においてはグリムの話とほとんど同じであるが、やはり結末が違っている。グリムの話では主人公は人間の姿になった後王様から王国を譲り受けるのだが、トラベラーの類話では王様はりねずみ男の飼っていた家畜を少し譲ってもらい、男の方は王女とふたりでもと住んでいた森の王国へと戻って行くのである。ここにも、もとの生活態度を否定することのない姿勢があらわれている。

5. おわりに

以上簡単にではあるが、スコットランドのトラベラーの伝承を見てきた。そこには、世界各地ですでに途絶えて久しいといわれている生きた伝承の姿がある。ところが、社会環境が変わるにしたがって、以前のような旅の生活を捨てて定住するトラベラーが増えているというし、語りの場も徐々に失われつつあるというのが現実である。また、トラベラーの伝統文化を恥じて離れていく若者も少なくないそうである。しかし、今回紹介したふたりの語り手のように、古くからのトラベラーの伝統に誇りを持ちそれを伝えていくために語り続けている語り手たちはまだ多くいる。さらに彼らの子どもたちもまた語ることができるという。彼らの語る昔話はトラベラーの伝統を大切に、その生活態度を肯定するものであり、その昔話を共有することによって、自分たちがトラベラーであることを実感させるものである。自らのアイデンティティーを求めるトラベラーたちがいる限り、この語りの伝統は生き続けるであろう。

注

- 1) ここでいうスコットランド語 (Scots あるいは Scottish) とは、スコットランドで話されている英語方言とってよいが、標準英語と同じアングロ・サクソン語に起源を持ちながら、イングランドの英語がノルマン征服によってフランス語の影響を多く受けたのに対し、スコットランドの方ではスコットランドのゲール語 (Scottish Gaelic) とスカンジナビア系の言葉の影響を多く受けたため、標準英語とはかなり違った綴りや発音、語彙が使われている。
- 2) スティス・トンプソン『民間説話』(上) pp.46-47.
- 3) Hamish Henderson, "Introduction" to Williamson, *A Thorn in the King's Foot* pp. 16-17.
- 4) エジンバラ大学のスクール・オブ・スコティッシュ・スタディーズでは、フィールド調査で録音したテープを整理して音声資料室で利用者に提供している。全部は揃っていないようだが、テープを聞いて起こした翻字資料も利用でき、最近のものについてはコンピュータで検索できるようになっている。
- 5) Henderson, *Op. cit.* p.17.
- 6) Antti Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale*. 2nd ed. Helsinki, 1981.
- 7) Williamson, *Fireside Tales of the Traveller Children*, pp. 12-13, pp. 17-19.
- 8) *Ibid.* p.20.
- 9) *Tocher*, no. 33, p.147.
- 10) Robertson, *Exodus to Alford*, p.119.
- 11) Williamson, *A Thorn in the King's Foot*, pp.213-229.
- 12) Williamson, *Fireside Tales of the Traveller Children*, pp.21-33.

参 考 文 献

- Bruford, Alan. "Travellers' Tales" (Book Review) *Scottish Studies*, vol. 30 (1991), pp. 107-116.
- The Concise Scots Dictionary*, Aberdeen: Aberdeen Univ. Pr., 1985.
- Grimm, Jacob and Wilhelm Grimm. 『完訳グリム童話集』高橋健二訳 東京 小学館 1985.
- 岩倉千春「スコットランドのトラベラー」『民話の手帖』no.48 (1991) pp.20-24.
- Robertson, Stanley. *Exodus to Alford*. Nairn: Balnain Books, 1988.
- . *Nyakim's Windows* Nairn: Balnain Books, 1989.
- . *Fish-Hooses* Nairn: Balnain Books, 1990.
- . *Fish-Hooses 2* Nairn: Balnain Books, 1991.
- Thompson, Stith『民間説話』荒木博之・石原綏代訳 東京 社会思想社 1977
- Tocher*, no.33 (1980, spring), no.40 (1986) Edinburgh: School of Scottish Studies

- Williamson, Duncan and Linda Williamson. *Fireside Tales of the Traveller Children*.
Edinburgh: Canongate, 1983.
- . *The Broonie, Silkies and Fairies: Travellers' Tale*. Edinburgh: Canongate,
1985.
- . *A Thorn in the King's Foot: Folktales of the Scottish Travelling People*,
Harmondsworth: Penguin Books, 1987.
- . *May the Devil Walk Behind Ye!* Edinburgh: Canongate, 1989.
- . *Don't Look back, Jack!* Edinburgh: Canongate, 1990.

[平成7年(1995年)10月30日受理]

